

（佐伯惟治公四百五十年祭一昭和五十二年十一月二十五日）

佐伯惟治公の御生害

へ梅年礼実録——（補整）

一 惟治公日州三河内湯害の事

撰供 羽柴 弘

さて惟治公には、お供の人々と、かの若狭と父弥四郎の御興に、しばし旅し行く鬱をほらし給ひけれ共、ここは郷村につづいて城近し。また府内の様子も聞き給ひ度く、その後も里近かりければ宜しからず。この黒沢の峯について、風竟の地候うとて、右山路に入り給ふに、岫々たる岩壁九折り、松柏の音の、いつ日の出入るをも知らず。ようやく峯によじ登り、にはかに笹ぶきの小屋しつくり、府内の安否を聞き給ふ。餅原、野々下、坂下三士を商人に仕立て、荷物に似せて擔ひつれ出しける。残る人々も入替り、ここかしこと出しけれ共、恐びくつことなれば、敢て分りしこともなく、空しく月日を送りける。

さる程に、惟治公主従二十余人、野陣を出て、三河内へ越し給ふに、尾高千山といふ所に行きかかり、この所馬の足立たず。鞍おきなから乗りすて、峯越へ尾越へ谷を越へけるに、岩角に足をいため、ようやく半日ばかりに山の半腹にのぼり、岩を掬几に召され、諸卒に息をつかせ、四方を見

渡し給ふところ、郷民の輩一揆を起して思ひよらざる數百人、真黒になりて関をつくりて寄せ来る。

長田、本越、柴田などおのおの走りまわりて、何者なれば狼藉なる、名乗れ、聞きて委細をいおんと高声に呼われけるに、一揆共声々に、それなるは佐伯惟治と見えたり。此処に新名の一党控えたり。それにて御腹召され候べし。さなくば不肖ながら合戦仕り、おめおめと日州へ足入れさせんこと、思ひも寄らずと、傍若無人の田舎者、物を云はせそ打殺せと罵りければ、惟治公をはじめ、皆々道れぬところなりと、けさん御立て切つて捨て、歩行武者太刀業矢種残らず射つくして、稻麻竹葦の岡々の中、四方八方へ切廻り、撫でたおすこと麻を倒すが如し。

然るに餅原、野々下馳せかへり申しけるは、とても君の御運これまでなり。事急に候へば、仔細申上げず、新名へ長景より内通ありしと承る。罪つくりに一揆の輩五百七百名で倒すとも無益のこと、御防矢仕り候べし。御生害おぼされ、御無念の恨みを、冥土黄泉より報はれ候べし。返すがえすも、大友からびに長景が、誤なき、君を無実が沈め奉ること、無量劫を経るとも、その怨みを報ずべしとこそ存じ候と申しければ、惟治公いふにや及ばん。生々の鬱憤、たとへ命は滅すと、高魂は立七どころに伏せ報ひん。汝ら供せよと、高き岩に日奴の如く、肩身すばみ無念至極のことと

もなり。

此の峯、山高く麓遠し。朝の嵐肌を徹す。初冬の頃も谷の清水凍り、上下湯に忍びず。雪は日々に鷲毛を散せば、主従鶴髪を着て徘徊す。

惟治公、今はこれまでと観じけん。一きわ高き岩にかけより、寄手の双原よく聞け、我無実の讒によつて自害す。此の一念己ら三日の内を過ぎず思ひ知らせんと、鎧脱ぎすて下に抱ち、差添抜く間もあらばこそ、腹に突立て、怒とばかりに十文字に掻切つて、返す太刀を口に喰へ、岩角より真逆櫓に落貫ぬいて失せ給ふ。
餅原、野々下、坂下以下主君の御先途見とどけて、敵に割入り皆乱軍の中に討れたり。無残といふもおろかなり。

(注) 原文は文脈の通らない箇所があり、また用語、かなづかい古風にすぎ難解であるので、文章どととのえ、理解し易くした。——(側線)を施したと云ふはとくに諺句を補つて、文脈のすじを通した。
なお、この梅牟礼実録をはじめ、惟治公の最期については、次のような文献がある。

梅牟礼実記 大友興康記
両董記

尾高知廟境内 鎮魂碑 (自然石)

佐伯大神朝臣惟治魂

佐伯惟治公の戒名

章徳院殿前薩州刺史大猷正徹大禪定門 (光寺、屋島)
大光院殿故薩州刺史倍崎正徹大居士 (下屋野)
大知院殿前薩州刺史惟治正徹大居士 (弥生所切畑)
大智院殿先薩正慶血大居士 (北川所瀬口御頭神社)

佐伯惟治公を祀る神社

- (佐伯十社) 富尾神社 (佐伯市青山黒沢)
- 此花咲榮神社 (佐伯市畷田石打一合社)
- 富尾神社 (弥生所植松愛宕神社境内)
- 鷗尾神社 (直川村横川月形)
- 富尾神社 (直川村赤水吹原)
- 八坂神社 (弥生所江良一合祀)
- 星宮神社 (佐伯市鶴巻坂山)
- 富尾神社 (直川村上直見)
- 富尾神社 (佐伯市海崎字山口)
- 富尾神社 (富尾新瓦市尾一元郷社)
- (宇目四社) 鷗野尾神社 (宇目所大平)
- 鷗野尾神社 (宇目所千束)
- (日向六社) 尾高知神社 (北浦所古江字今村)
- 地下神社 (北浦所古江字地下)
- 鷗尾神社 (北浦所三ツ木梅木)
- 鷗野尾権現 (北川所長井)